「義」の社会史―中国史に見る共生のモラル―

二〇〇四年二月・人間学研究会にて

谷川道雄

谷川でございます、今日はお招きいただきありがとうございます。

私は水俣の生れで小学校の六年まで水俣で過ごしまして、そして旧制熊本中学で五年間を送りその後は大阪府立の旧制高校、そして京都大学に進学しました。卒業後しばらくしてから名古屋大学に勤めることになり、これは二十六年の長きにわたりました。その後京大へ移り十年後定年退職しました。退官してから西本願寺系の龍谷大学で八年間勤めました。現在はすべての教職を退き、予備校河合塾に付置された河合文化教育研究所というところに研究員として籍を置いています。こういうわけで郷里の熊本へ帰ることも少なく葬式や法事に帰るくらいで、考えてみますと次兄（雁）が亡くなった平成七年に松橋で納骨をした時以来、熊本へは帰っておりませんでした。郷里のことは時々夢の中に出て来たりして懐かしく思っておりますが、今回話をするように仰せつかり大変うれしく思ってやって参りました。

この研究所で皆さんが勉強しておられる、それも単なる専門家の集まりではなくて、いろんな仕事をしながらまたその経験を持ちながら共に勉強しておられる、それは本当に貴重な試みだと思います。郷里にそういう集まりがあることは羨ましい限りで、私がもし熊本にいることができればきっと皆様の仲間に入れていただいていたのではと思っております。

自と他の関係から中国史を見る

今日は近代以前の中国の歴史と今日の中国とをどうつないで考えるかをお話ししてみたいと思います。そのやり方はいろいろあると思いますが、一つのやり方として義の社会史、副題に中国史に見る共生のモラルという題をつけてみました。これはある所で話したことがありますが、今日の話はそれに新しい部分をつけ加えています。現代という時代を考えて見ますと、人間は好むと好まざるとに関わらずさまざまの共同体関係から切り離された形で毎日の生活を営んでいるのが今日の社会の特徴だと思いますし、自分と他者とのいろんな矛盾関係、これは近代以前からあるにしても、現代社会においては自と他の関係が特別厳しい状況にあります。これの端的な現れが最近頻々と起こっている犯罪ではないかと思います。中でも青少年の犯罪ですが、その動機には何か自分を示したい、確認したいということがあって、それが人を傷つけたり死に至らしめるような他者の否定を通じて現れて来ているのではないかと思うのです。事件の後でテレビに出たかったと語るとか、どういう風に報道されているかを弁護士に聞いたりするとか非常に自分が露出していて、自意識がとても強く、しかしどうにもならない所からそういう行為になってしまうという、正に自と他が共生できない非共生の最たるものだと思うのですが、要するに何か自己の問題を処理できずに犯罪行為に陥ってしまうことがあるのではないかという気がしています。

そうした自と他の関係の問題、そういう所に視点を合わせ、近代以前の中国の歴史の展開の跡を考えるとどうなるだろうかということを、義という言葉をキーワードとして考えて見ようと思います。

義という言葉が表すもの

義という文字の本来の意味は、甲骨文、金文で文字の成立ちを考えられる白川静先生のお説によって見てみると、羊に我（マサカリの象形）を加えたもので、神に犠牲を捧げる儀式の型から来ていると述べておられます。現代の辞書を引いて見れば義とは正しいとか利害を捨てて条理に従う、公共のために尽くす等と出て来る。また義兄弟などのように、本来的な関係になぞらえた関係を指すこともあります。南宋時代の『容斎随筆』という書物には、義の意味の一つとして「衆と之を共にするを義という」と述べ、そのいろいろな例を挙げています。

一昨年中国の武漢大学に呼ばれて行きましたが、その講

演でこの義の話をしたところ、ある学生から義は日本語でどういうかと問われ、正しさと答えようとしましたが、水俣にもやい館というのがあるのを思いついて「もやい」と答えてみました。そのもやいの精神と考えてもよいと思います。

義はかなり多義的な言葉ですが、利の限界性を越える所から来る一つの精神のあり方を義という言葉で表していることがわかります。

この考え方を周の終わりくらいから戦国時代にかけて現れた儒者の一派の人達について見ると、孔子は「子曰く、君子は義に喩り、小人は利に喩る」（君子は義にさとく小人は利にさとい）と言っています。ここでの君子とは指導者としての人格を持った人、小人は指導される側の人達のことですが、私の解釈ですけれども、どういう精神態度を持っているかということが君子と小人、つまり治める者と治められる者、支配者と被支配者とを分けるのだという孔子の考えです。それ以前の殷周時代は世襲制の時代で支配者は血縁によって先天的に決ってしまっており、孔子はそれはおかしいと言い出しました。その資格を持った人間はどんなに出自が悪くとも君子と言うべき人であり、義に喩るのが君子の資格であって、そこを出発点として政治が行われてゆくべきだと考えました。

戦国時代の孟子は孔子の孫の弟子の弟子に当たりますが梁の恵王にお目見えした時に、王が「先生は我が国に大きな利益となる戦略をたずさえてはるばるやって来られたのでしょう」と言うと、それに対し孟子は国の政治をやるのは利ではなく仁義なのだと答えました。このように利に対立する言葉として義が使われていて、こういう形で古代の政治倫理は義と利の関係の中で主張されていました。

諸宗教に見る義の行為

その春秋戦国の後に秦、つづいて漢の二大帝国が出現して全国を統一し、皇帝政治の時代が到来しましたが、漢帝国が滅びていく過程で新しい宗教が生まれて来ました。丁度同じ時代ローマ帝国の時代にキリスト教が入って来てローマの古来の神々の信仰を乗越えて個人の宗教が出て来ます。それはある意味でローマ帝国を精神的に解体へ導いて行ったとも考えられるわけですが、中国でも後漢帝国時代に道教が出現して、漢帝国を批判する立場に傾いていきます。

その時代の道教は初期道教といわれ、東と西の二方面で発展しました。漢帝国が崩壊し世の中が大混乱に陥り、故郷を離れて集団であちこち移動、流浪する流民が生じたとき、西方の道教教団は彼らに宿舎や米・肉を提供しています。そこではもし欲を出して必要以上に取った場合には神が罰を加え刑罰が与えられるという制度が定められていました。彼らに提供される食物は道教の信徒から拠出されたもので、その量は限られています。その限られた量を皆で分かち合う精神を失った者は罰せられるというわけです。

その時代の後に著された書物に『抱朴子』というものがあります。その中の一節に道教の戒めを記していますが、己と人、自己と他者の二つを言葉としてはっきり打ち出しています。「人の幸いを願い、人の苦しみを憐れみ、人の急を救い、人の窮を助く、手に生くる者を傷つけず、口に禍を勧めず、人の得を見ること己の得の如くし、人の失を見ること己の失の如くす。自ら貴ぶらず、自ら誉らず、己より勝れたるものを嫉妬せず、云々」。こういう考え方を当時の道教は説いています。ついでに申しますと日本の古代にも道教の影響はかなりありますが、ただ道教が日本へ来た時、人、己の関係で日本人が捉えていたのかどうかはわかりません。ある種の風習は取り入れたのかも知れませんが、その根底に人と己というような人間存在の矛盾した関係の中で捉える考えが日本でも受容されたのかどうかは今後の研究課題です。

この書物には人の幸を自分の幸とするようなことが善であり、そのような善行を積んだ人は不老長寿となり、反対の人は早死にすると書いてあります。こういう考え方はずっと後まで続いていて十世紀頃の「太上感応篇」という本にもだいたい同じ文章が出て来ます。

こうした書物は功過格といって、人々の日常生活で功（善行）が多いか、過（悪行）が多いかを量り、それによってその人の運命が決まると説いています。その功と過は、己と人との関係をどう実践するかが基準となるわけです。民衆の間には庚申（かのえさる）の日に、体内に宿っている三匹の虫が当人の眠っている隙に天上にのぼり、天帝の所へ行きその行いを報告することと信ぜられていて、その日は皆眠らないで一夜を過ごすという風習がありました。江戸時代には日本にも伝わって庚申講という行事があり、それを題材にしたのが近松の心中宵庚申という悲劇の物語です。つまりこの時代になると道教倫理が民衆の間にも広がって来たことが分ります。

ところで新約聖書にはパウロの「コリント人への第一の手紙」が収められていて、そこには、愛は寛容で情深く、またねたまず高ぶらず誇らないと説いています。ここには道教の教えに近いものが見られるのですが、その人との矛盾を越えるモラルを説いた点からすれば道教にも愛の宗教という一面があると言えるかも知れません。

今まで道教について見て来ましたが、仏教はどうかというと、現在の北京から西南に当たる土地に《標異郷義慈恵石柱頌》という石柱が立っており、これは義によって生れた集団が困窮した人々にいろいろな慈善を施したことを表彰した石柱です。五七〇年、南北朝の混乱した時代に建てられたもので、北魏という国家が瓦解して難民が出て餓死者も出るような悲惨な状況でありましたが、ある篤志家が立ち上がって義という名の慈善団体を作り、死亡者を郷葬（埋葬）し飢民を義食（救済）し、医薬品を施してそこに義堂という建物を建設しました。この人間学研究所も一つの義堂といえるかも知れませんね。精神的に飢えた人が集まって来られるわけですから。そしてそこに現地の名望家や豪族や平民も参加して二百人余りのグループとなり、当時の都の洛陽から名僧の曇遵らを招いたという話が石柱に刻みつけられて残っています。

名望家の義の精神

義の行為は宗教だけかというとそうではありません。当時北中国の地域社会にしっかりと根づいて戦乱の中をくぐり抜けて来た名望家たちは、うやって自分たちを守ってきたか。有志の指導者たちは窮民を救済して地域を守り続けて来ました。私は数十年来こういう共同性の問題を考えてその時代に即した研究をして来たのですが、戦後の日本の学界には唯物論（というよりはタダモノ論）が盛んに行われてその影響から、随分強い批判を受けました。私は地域名望家の倫理精神が中心となって形作られる地域連帯を豪族共同体と呼んできたのですが、何か物質的なものがなければ人間は共同体は作れないと批判されたわけです。私は最初に自と他を守って行こうという意志がなければ、いくら物質的なものがあってもだめで共同体にはならない、自分の財産に余裕があれば他人に施すというような、自己を超越する気持なしには当時の社会は大混乱に陥ってどうしようもない情況から抜け出せなかったと思います。

そういう名望家の義の精神はどういう言葉で表現されているかといいますと「軽財重義（財を軽んじ義を重んずる）」という風に利と義との関係の中で捉えられております。またこの時代には有名な九品官人法という官吏登用法があり、官僚になる資格はその郷里社会における道徳や才能の評価によって人物のランク付けが行われ、それに従って政府での役職が決まって行く。郷里での民衆との関わり方が官僚としての資格を決める大きなファクターの一つでありました。たとえそれが偽善的であるにしても、この時代の地域豪族たちはこのように暮していたと言えます。

義の制度化、組織化

その後十世紀を境にして中国社会は大きく変化しました。いわゆる唐宋の変革です。この時代に科挙の試験に合格して役人になった人々が士大夫層を形成しますが、この近世士大夫がいろいろな制度を作って行きました。その一つに范氏義荘があります。北宋の范仲淹という人が自分の一族の生活を安定させるために考案した制度です。それが先例となって各地に宗族制度の復活と発展が図られます。自分たちの共通の祖先の祭祀を基本として結束し族人の救済を図るのですが、そのためには基金が必要なので義荘という共有地を設けその土地を経営して救済する、そして一族では系譜を作成するという形で制度化しました。最初は官僚士大夫から始まり次第に商人階級や一般民衆へと広がって行き、近代では毛沢東時代に抑圧されましたが、現在また復活発展しています。

民衆の中でも義を中心としていろいろな組織化が行われました。南北朝時代には義邑と呼ばれる宗教結社のようなものができ、また唐代の敦煌あたりでは社邑という相互扶助のための結社を作っております。その中で実際の兄弟ではなくとも兄弟結義、つまり義兄弟関係を作ることも始まりました。

宋の建国者趙匡胤もこうした兄弟結義によって覇権を握りました。兄弟結義はフィクションの中にも採り入れられて、民衆相手の講談の中にも生きています。「三国演義」や「水滸伝」がその代表で、民衆はそれらによって義侠心を養い反権力の意志を培ったわけです。

それらは教門・会党とよばれる秘密結社の発生につながっています。清朝末期には天地会、哥老会、三合会などの会党が非常に大きな力を持ち、満州王朝たる清朝の支配に非常に反感を持ち、むしろ清に滅ぼされた明の国をもう一度復興させようとする滅満復明の考えを受け継いでいきました。こういう組織に力を借りて孫文らが辛亥革命つまり満州王朝を倒し民国を興そうという大きな政治的な動きが生まれるわけです。これはまさに義を媒介にして結びついた人々が大局に関って行く力の根源になったものと言えます。

秘密結社を大きく分けると紅幫（ホンパン）、青幫（チンパン）の二つになって来ますが、青幫は親分子分や義兄弟の関係を結んでできたもので、中国の南には水運に働く労働者が多いのですが、こういう人たちを吸収したのが青幫です。後に蔣介石と組んで活躍するのですが、中共が力を得るに至ってこの組織は途絶えます。

義の社会史、精神史と中国の現実

これまで申し上げてきたことをまとめてみますと、中国の人たちが義という理念で自と他の矛盾を乗り越えようとしてきたことが分かります。そしてその現象形態は、古代の祭儀から政治思想へ、中世の宗教・倫理による社会集団の結成、近世の民衆を含む新しい社会結合、という風にくっきりとした時代精神の軌跡を描いています。これは義の社会史でもあり、又義の精神史と呼んでもよいでしょう。そしてそれは、近代の革命にまで接点を持っています。

とすればこの義の社会史、精神史は今日の中国の現実にどう生きているでしょうか。しかしこれは非常に難しい問題です。武漢大学で義の話をした時に現代をどう語るか非常に困り、ボランティアの話で誤魔化しましたが、阪神大震災やロシアのナホトカ号の座礁事故でのボランティアの活動を漢字で表せば義ということになるのではないかと話しましたところ、中国の学生からボランティア活動をして自分のためにどういう効果があるのですかと尋ねられ、言下に効果なんか何も求めないんですよと答えました。恐らく中国の現代社会では真正な意味のボランティア活動というようなものはあまりないのだと思います。

自分の利益には何もならないのに奉仕するという精神を現代における義と考えれば、それをなぜやるのか、究極には自分のためにやるのでしょう。自分のための自発性で自分の生きる証しを求めているわけで、そこにしか自己を確認できないということはあまり健全なことではないかも知れません。しかしながら人を助ける形で自分を見つめていくのは否定さるべきことではありません。

最近二年半ぶりに帰国した中国人の留学生から手紙を貰いましたが、久しぶりに帰国して愕然としたとありました。いまの中国人には欲と金と自分を売込もうという気持ちと、それしかないことに非常なショックを受けたというのです。

この二年半の中国の社会の変化のスピードを考えると、彼の印象は決して誇張ではなかろうと思っています。鄧小平以来の開放政策で現代の中国はめざましい経済発展を遂げましたが、光には必ず影があると思います。

『中国年鑑』（二〇〇三年）の治安、犯罪の項目にはその影の部分がはっきりと読みとれます。党中央規律委員会によると都市人口四億五千万人の内一億人近くが貧困線の境目にあり、〇二年には四一〇余りの都市で計五万六千件以上のデモ、示威、集会活動が行われ、参加者総数は延べ四百万に上ったとあります。これが日本で行われたらすごいことです。労働者階級はメーデーや国慶節前後の休みに集

まってデモをやるようです。農村も大変苦しいといわれており、収入の低さに対して地方の税金が高く、多くの共産党や行政機関の幹部を養わねばならず、それが大変です。中国の古い言葉に「十羊九牧」というのがありますが、役人の数を民衆が支えきれず、そこに汚職・暴力などいろんなものが積み重なって、それにたえ切れない農民が県政府を襲撃するという事件が相次いでいます。

現代中国の影の部分

農業、農村問題担当の温家宝副総理（現総理）は農村地区が不安定で暴動発生の気配があるのは①役人を養うために徴収される農民負担が重過ぎる、②「黒社会」（秘密結社組織）が農民を暴力抗争に駆り立てている、③宗教勢力が反政府活動を煽動し封建的組織を結成している、④農村地区の党、政府組織の多くが長期にわたりマヒ状態に陥っていると述べ、さらに現段階における農民抗争事件の特徴として①政府倉庫を組織的に襲撃、略奪し山分けする、②数百人から一万人規模の集会を開き政府農民間の契約や手形を焼却、③自発的に村、郷政権を樹立し武装した自衛隊を組織、④広域的に交流し数万人規模で県政府を包囲しマヒさせる、⑤政府庁舎や交通施設などを武装占拠する、と指摘しています。

〇二年には暴力的な略奪事件及び党、政府機関を襲撃、占拠する事件は計四百件余りに上っています。農民たちが本当に苦しい状況の中で暴力的になって行き、それに加えて黒社会といわれる暴力団組織や法輪功などの宗教団体があって、現代の中国も影の部分が決して小さくないことを申し上げたいのです。ここに出て来ているいろんな現象と清朝以前の義について述べた事柄は決して無関係ではありません。つまり黒社会や、宗教団体系のものにどういう人たちがどういう形で入ってくるのかというと、生活ができない、家族生活もなかなか思うようにできない、そういう時にそこから抜け出して違った世界にはいる。はいったら義兄弟の契(ちぎり)を結び、兄弟として扱ってくれ、食べさせてくれる、そこへはいり込んでいくわけです。これが段々大きな組織になって行き、場合によってはそれが政治的な力になって王朝を打倒するところまで行ってしまう場合もあります。そこまで行かなくとも王朝が財政的、軍事的に手こずって清代の白蓮教の乱や太平天国の乱のように衰弱していくことがあります。

義と不義の両義性

人間には生きていく時にお互いに家族的な交りで生きていきたい、そして困った時には助けてもらいたいという考えがあるわけですから、それを政府が保証してくれないと、そうしたアウトローの行動に走るのは当然のことだろうと思います。これまでもお話した例のような時期や状況のもとで、但し黒社会などに一遍はいったら厳しい掟でなかなか抜けられないそうですが、そこにおける義兄弟結合はお互いに助け合う世界を作ります。しかしそれが場合によっては他者に対して危害を加える暴力や麻薬や売春の犯罪に関わり、内部的には義だが外に対しては不義である矛盾があります。しかしある場合には不義の部分が小さくなり、義が外側まで拡大して現実の政治社会の問題を動かしていくための力になっていくといった両義的なものを持っています。しかし現代中国を研究している学者はまだあまりこういうことに目を向けていない気がしています。

日本の社会は割合秩序的にやって来ていますから、上の方の力に対してはかなり大人しく節度を守っており、悪く言えば言いなりになっている。中国の民衆は日本人よりも知識や学問はないかも知れませんが、上からの暴力に対して下からこれに対峙していく姿勢は日本人よりもずっと骨太だと言えると思います。丁度中国の自然が日本のようになだらかで美しく優しい山河ではなく非常に厳しい景観を呈しているように、そういう厳しい自然と社会の環境の中で中国の人達は人と人とが何とか頼り合って生きて行かなくてはいけないことの必要性が身にしみてきたはずで、その気持ちを義ということで表現してきたのではないかと思います。

まだまだ私の考えは未熟で浅薄なものですが、そういう風にまず考えてみて、先ほども申し上げましたように、いま中国社会は急激な市場経済の発展を基本要因として、大きな矛盾を抱え込んでいます。一方に自利のみを追求する風潮があり、他方に窮乏を強いられた農民その他の民衆があります。この不安定な情況が今後どういう方向へ進んでゆくのか、きわめて不透明といわざるを得ません。しかし数千年来の義のモラルと情念がそこにさまざまな形で生きて働いてゆくであろうと、勿論単なる推測にすぎませんがそう考えております。

（以下質疑応答）

問）義をキーワードにして考えると、現代の中国社会では血縁、地縁を大事にする伝統が急速に壊れて来ているのではないかという気がします。例えば日本はアメリカより丁度十年遅れて学校や社会の問題が深刻化したが、中国も従来の価値観が壊れて来ているのではないでしょうか。

答）そういう一面は大いにあると思います。傾向としては先程も中国留学生の手紙を紹介しましたが、中国人の中にあった人と人とのつながり、人と組織とのつながり、人と国家とのつながりの三つが切れてしまっており、彼は非常に失望し余程深刻に受け止めたらしく、自分がいない二年半の間に中国は変わってしまった、と言っています。帰国時の第一印象が強かったせいかも知れませんが、実際に人間関係が壊れて行っている面は非常に強いようです。そういう中で人と人とがお互いにまたつながろうという営みがどういう形で行われているかを見て行かないといけないのですが、残念ながら材料が不足しています。

日本でもそうですが、社会の従来のあり方が高度成長以来急速に崩れてしまい、特に農村が変ってしまいました。恐らく日本社会の基盤は農村にあったと思いますが、都会に出るにしても農村を基盤にしているわけです。それが高度成長を境に変ってしまい、全体が根無し草的になってしまいました。中国の場合八十年代、九十年代に急激に市場原理が社会に浸透し、ますますこれが広がる中で個人主義、利益第一主義の仁義なき社会になって行っています。中国の本来的なメンタリティーが壊れてしまうかも知れないという危機感は私だけではなくかなりの留学生が持っている。しかしもし中国がそこを乗り越えられたら、これはまた素晴らしい世界史の創造となるはずですが。

現代中国の光と影については報道関係の方々に教えていただきたいのですが、黒社会と共産党は癒着している点が多く、自分たちで秩序が保てない所は黒社会に依存するということがあります。両者は癒着関係が強いと同時に矛盾関係もあって対立している面があり、そこが微妙なところです。

今日は義の話をしましたが、正しさを表す言葉としては正義の正があります。白川説によれば正の正しさは軍隊が敵の城郭を攻めることだといいます。そこで私流に解釈しますと、国家が決めた正規の正しさが正で、義はそれに対して自発的なボランタリーなものではないかと思います。ちなみにボランティアのもとの意味は「義勇兵」です。ともかく現代の中国からそういう精神が薄れて行っている。今の滔々たる潮流には抗いがたいものがあり、我々もそうですが、その中で人間の連帯する意識がどう芽生えどう育って行くかを見守ることが大切である。

古い中国社会に育って来てそういうものが人間関係の中で大事であると思っている人たちは、豪族中心の共同体の中で、支配する側とされる側とがある意味では一体となって社会を守っていくという私の考え方には共鳴するはずです。そういう時代を知らないとこの考えはおかしいと思う

かも知れませんが、中国では割に若い人でもそういったことをわかってくれるように思います。

問）白川静先生とのお付合いはいかがなものだったのでしょうか。

答）一番最初にお目にかかりましたのは私が名古屋大学で助手をしていた時に、恩師の宇都宮清吉先生が白川先生に大変敬意を持っておられて集中講義に招かれました。昭和三一、二年の頃だと思います。助手としてお世話したのですが、トランクに一杯本を詰めて抱えて来られたが、とても重かったことを覚えています。私は宇都宮先生と出会わなかったら曲がりなりにも研究者としてやって行けなかったと思います。宇都宮先生は戦後台北帝大の予科の教授をしておられ、戦後引き揚げて来て京大の助教授になられ、私は丁度その時学生でした。その後新制の名古屋大学に移って行かれた後に私が助手になって再会した。

先生は宮崎市定先生の後輩で、大そうヒューマニストでした。京大で卒業生を送る会をやった時に、自分の学生時代の話をされ、京大の東洋史に入ったがあんまり面白くなく辞めようと思ったが結局続けざるを得なくなったという話をされ、私は学生として聞いていて先生でもそういうことがあったのかと非常に感激した。先生はその後卒論を書く時にこの世で一番惨めな思いをした人間のことを研究しようと考え、そこで漢代の奴婢の研究をされたということです。こういうところに先生の面目があり、トルストイアンでもありました。先生は歴史を考えるには政治形態だけではなく人間社会の一番ベースにあるものを考えないといけないという立場でした。

私はそういう訓練を名古屋で受け、もう一人の恩師宮崎市定先生にはないものを学び、人間が存在として生きている根源的な場所から歴史を考えるという見方を教わりました。宮崎先生からは制度の表す時代性を通して歴史を見るという手法を学び、宇都宮先生からは人間存在のあり方から見るという歴史の方法を学び、両者をミックスしようとしてしそこなったのですが、本当にいい先生方に出会えたと思っています。

白川先生の出会いの話が宇都宮先生のことになってしまいましたが、白川先生は戦前の立命館大学の御出身で殆ど独学で中国古代史を開拓された方です。例えば貝塚茂樹先生のようなエリート学者では決してありません。今でこそ白川学説は世界の学界に燦然と光を放っていますが、昭和三十年代初めの頃はまだ学界から異端視されていたように感じます。

京都における甲骨文、金文の研究の主流はやはり京大人文研の貝塚班とされていたと思います。そういう時代に白

川先生を非常勤講師として招かれた宇都宮先生の見識について申し上げたかったのが、横道にそれてしまいました。名古屋大学に来られた折の話はまだ幾つかありますが省略します。

問）中国の義は日本の義理人情とはどう違うのでしょうか。

答）日本の場合は義理と人情が離れているという感じがします。つまりいわゆる義理と人情の板挟みで、二律背反的な関係で言う場合が割と多いのではないですか。義理は封建社会で主君に対する忠誠義務から来ているように思います。もともとこの言葉は中国から来たのでしょうが、日本の義理は人情を押し殺して上位のものに服務するエートスを指すように思われます。中国の義も利己心を抑えたところに成立するモラルですが、それ自体内発的なもので、孔子によればその内発性を持つ者が君子だというわけです。この日本の義理と中国の義との関係は、どこか公私観念の相違に通じるところがあるようです。公と私といった場合、日本の公は自分を離れた外から来る力が公であるという観念（例えば公儀）が割にあるのではないかという気がします。（おおやけは大宅つまり君主または国家の建造物でしょうか。）中国の場合公私というと一寸違うようで、個人そのものの中に公私二つの社会に対する態度があると考えられていたかも知れません。中世の名望家の家は私生活の場であるにも関わらず家を経営し家計を営むことを公務と考えていました。先程申し上げた財を軽んじ義を重んじて人々を救済する行為は、この公務の一環であったらしいのです。

自己と他人の存在が現実的には非常に矛盾しぶつかり合っており、それを何とか越えなければいけないというのが中国社会の大きな課題で、日本ではそれがあまりはっきりなかったのではないでしょうか。日本では自他の関係は個人と家とか、個人と国家とかそういう関係になって来た。中国社会には厳しい人間関係があり個と個の間の切れ込みが非常に深いように感ぜられます。そういう時代になって来るのは大体春秋戦国時代からで、それまでは氏族社会が基本でした。その氏族社会が春秋戦国時代に分解して小家族になったことと無関係ではありません。

日本の場合は氏族社会がそのままずっと移行しながら地縁社会に生きている面が強いのではないでしょうか。その村の構成員は掟にそむくことは許されない。中国は小家族に分かれ、財産は均分相続で兄弟は何でも平等に分けるのですが、ある種の平等な関係を表現する方法として兄弟関係が応用されて義兄弟結合を生み出します。そして家族関係になぞらえて家族以外の人々とのつながりを作っていきます。これは日本にはあまりないようです。